

明している41症例（男性28名，女性13名）である。初診時の年齢は7～89歳，平均44歳であり，腫瘍の組織型は脂肪肉腫11例，神経肉腫6例，MFH 4例，明細胞肉腫4例，線維肉腫3例，滑膜肉腫3例，その他10例であった。発生部位は，大腿が最も多く9例，上腕が7例，前腕，下腿，体幹が各4例，腋窩，鼠径部，足部が各3例，手部，後腹膜部，膝窩部が各1例であった。全体の生存率は74.4%であった。切除範囲と再発率，化学療法の有無，患肢温存手術と切断術，組織型，切除範囲，年齢（40歳未満，40歳以上），性別を予後因子として検討したところ，化学療法施行群で有意に生存率が低かったが，それ以外では有意差を認めなかった。また切除範囲の違いによる生存率では有意差を認めなかったが，切除縁が狭い場合には予後が悪い傾向が見られた。再発率は，腫瘍内切除では100%，腫瘍辺縁内切除では62.5%，広範囲切除では23.1%，治癒的切除では0%であり有意差を認めた。

今回の調査では初回の切除範囲が再発率に影響しており，再発を防ぐためには切除範囲を，腫瘍の反応巣から5cm以上離れた治癒的切除とすることが重要であると考えられた。また，切断術と患肢温存手術では有意な予後の差は認められず，今後も患肢温存手術は選択されるべき術式であると考えられた。しかし不適切な切除範囲は局所の根治性を低下させるため，患肢温存手術を行う場合は十分な術前評価により切除縁の設定を行い，治癒的切除を施行するべきであると考えられた。

19) 上腹部に巨大腫瘍を形成し確定診断に難渋した膵癌の一手術例

吉田 崇・谷口棟一郎
 家里 裕・内田 和宏（小千谷総合病院）
 大矢 敏裕・横森 忠紘（外科）
 福田 剛明（新潟大学第二病理）

今回上腹部に巨大腫瘍を形成し，臨床的及び病理学的に確定診断に難渋した膵癌の一手術例を経験したので報告する。

症例は54才男性で1993年9月右季肋部痛を主訴に来院し，右上腹部に手拳大の硬い腫瘍を触知された。CT上，膵前面の高さに巨大な不均一な腫瘍がみられ，境界は比較的鮮明であった。胃，十二指腸下行脚は左右に圧排されており，又膵体部は同定できるが，頭部は同定できなかった。

精査の結果，膵癌又は消化管由来の肉腫が疑われたが，術前に確定診断には至らなかった。

1993年10月13日手術を施行した。腫瘍は，胃体部～幽門部大弯側にあり，手掌大で凹凸不整・結節状・充実性であった。肝右葉・胆嚢・膵頭～体部・胃体部～十二指腸・横行結腸に浸潤性に癒着し，原発は不明であった。

胆嚢・肝右葉・横行結腸合併切除による膵頭十二指腸切除術を施行した。

病理所見では，tumor は epithelial arrangement を示す small round neoplastic cell から成り，当初は desmoplastic small round cell tumor of abdomen という極めて稀な tumor が考慮されたが，その後の検索で poorly differentiated adenocarcinoma と診断された。origin は location などから pancreas 由来で ductal carcinoma とされた。

術後約5ヶ月後の1994年3月に肝転移のため再入院した。肝動注リザーバーより，CDDP を動注投与したが5月15日死亡した。

本例は pancreas 由来の ductal carcinoma ながら非定型的な発育形式を呈し周囲臓器に浸潤性に波及しながら巨大腫瘍を形成したため，術前・術中の臨床診断が困難で，更に極めて特異的な組織像を呈したため病理診断にも難渋した症例である。

20) 術前化学療法が奏功した進行食道癌の1切除例

島多 勝夫・鈴木修一郎
 山岸 文範・湯口 卓
 沢田石 勝・増山 喜一（糸魚川総合病院）
 大西 康晴（外科）

切除不能と推測した進行食道癌に対し，downstaging を目標にさまざまな集学的治療が試みられているものの，いまだに確立された方針がないのが現状である。今回われわれは術前化学療法単独にて切除可能となった進行食道癌の1例を経験したので報告する。症例は57歳女性。平成5年11月より嚥下困難，食欲不振出現。諸検査にて長径約8cmにわたるImEiの食道癌を認め，右肺（S₆）への直接浸潤，下行大動脈および椎体への直接浸潤（A₃）を強く疑われたため，CDDP+5-FUの低用量連日投与を施行した。4クール終了時点で腫瘍は著明に縮小し，PRと判定した。呼吸機能低下等の合併症を考慮したうえで食道抜去術を施行した。病理組織学的には癌細胞の変性，線維化，異物巨細胞の浸潤がみられ，粘膜筋板までにとどまる中分化型扁平上皮癌がわずかに認められるのみであり，制癌剤による治療効果はGrade2と判定された。経過は良好であり，延命を期待し術後補助化学療法